



# 世界の デンジャー・ スポット

The Danger Spots in the World

## ▲ Lake Ijen

インドネシア

# 青い炎が燃える「死の湖」 イジェン湖

- ▶ エメラルドグリーンに輝く火山湖
- ▶ 有毒の火山ガスが多量に溶け込んだ強酸性の危険な湖水



1万以上の島々で構成されたインドネシアの中心となるジャワ島東部には、美しさと危険さを兼ね備えた活火山、イジェン山がそびえる。標高2600mの山頂には直径約1kmの巨大なカルデラがあり、火口付近にはエメラルドグリーンに輝く神秘的な火山湖が存在する。一見すると非常に美しいのだが、この湖水は多量の火山ガスが溶け込んで強酸性になっており、「死の湖」と呼ばれるほど危険なのだ。

また、火口から噴出する硫黄ガスは燃焼する際に

青い炎を放つため、夜になると岩肌を流れ落ちるかのように揺れる青い炎に包まれて神秘的な姿を現すのだが、周囲には同時に発生する高温の有毒ガスが立ち込めており、非常に危険だ。

このような危険な場所であるにもかかわらず、イジェン湖で働く人々がいる。彼らは火口付近で肥料や洗剤の原料となる硫黄鉱物を採掘しているのだが、タオルを口に巻く程度の軽装備で、有毒ガスを吸い続けながら昼夜を問わず働いているという。



【左】陽が落ちると火口は鮮やかな青い炎に包まれ、闇夜に幻想的に浮かび上がる。【右上】採掘した硫黄を竹かごに入れ、約4kmの山道を降りていく作業員。【右下】危険なガスが充満するなか、300人以上が働いている(写真：R.M. Nunes / Shutterstock.com)。

荒々しい山肌とは対照的に、エメラルドグリーン湖面が美しいイジェン湖。現地では「緑のクレーター」、「緑の火口」を意味する「カワー・イジェン」と呼ばれている。有毒な硫黄ガスが絶えず噴き出し空へと昇っていく様子は、地球上の光景ではないようだ。



## 12 MaeKlong Railway Market

タイ

線路上の折りたたみ市場

# メークローン市場

▶ 線路上にまで広がるユニークかつ危険な市場

▶ 列車が通るぎりぎりに屋根を畳み、通過すると商売を再開する



タイ中部、ウォンウィアン・ヤイ駅とメークローン駅を結ぶ鉄道路線、メークローン線。その終点であるメークローン駅前の線路の両脇には、「世界一危険な市場」と呼ばれるメークローン市場がある。もともとは線路沿いの場内市場だったが、買い物客をより多く集めようとした商店が次第に駅に近付いていき、やがて線路上にまで広がるようになったという。そして、この線路を走る列車が1日に3往復程度と少ないこともあり、線路上で市場が開かれると

いう世界でも珍しい状況が生まれたのだ。

屋台では生鮮食品から日用品までさまざまなものが売られており、多くの人でにぎわっている。しかし、列車接近の放送が流れるやいなや、店主たちがいっせいにパラソルやテントの屋根を畳み始め、陳列している商品を片付けて列車が通るスペースを空ける。そして列車が通り過ぎると、何事もなかったかのように営業を再開するのだ。その光景が話題を呼び、現在は世界中から観光客が訪れている。



【左】列車が通れるギリギリのスペースを空けて通り過ぎるのを待つ店員たち(写真: puwanai / Shutterstock.com)。【上左】通常時の市場。一見すると普通の市場だが、線路の中心が通路として使われている(写真: Constantin Stanciu / Shutterstock.com)。【上右】レール上に魚が並ぶシュールな光景(写真: Anton Gvozdikov / Shutterstock.com)。【下】列車に触れないぎりぎりの高さに商品を並べる陳列技術も見事(写真: SIHASAKPRACHUM / Shutterstock.com)。

## 15 Kyaukse Pagoda

ミャンマー

落ちそうで落ちない黄金の巨石

# チャイティーヨー・パゴダ

- 》ミャンマー全土から多くの仏教徒が巡礼に訪れる聖地
- 》大地震が起きても落ちない石は、まるで重力を否定しているかのよう



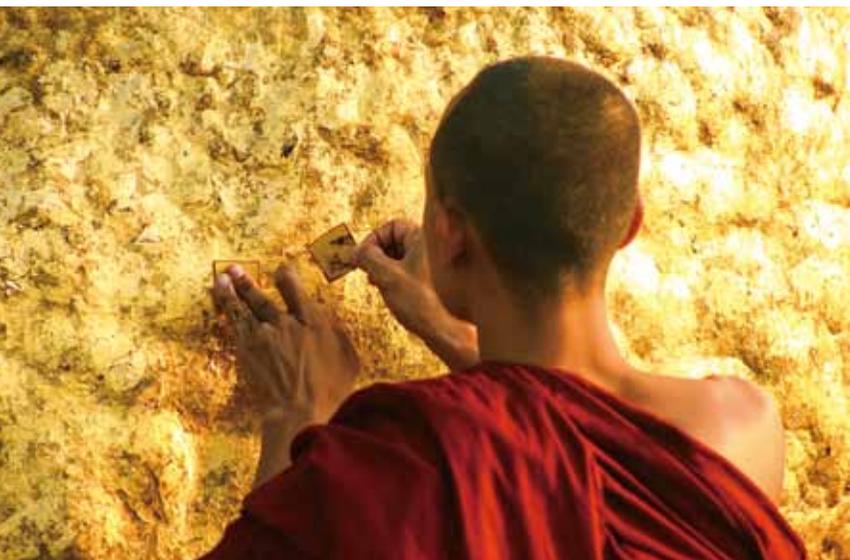
【アクセス】チャイトーから麓の村キンブンを經由し、中腹のヤテタウンまで車と徒歩で約2時間20分。

ミャンマー南東部、ヤンゴンの北東約180kmに位置する、標高1100mのチャイティーヨー山。その頂上には、パゴダ（仏塔）を乗せた金色に輝く巨大な石、チャイティーヨー・パゴダが今にも転がり落ちそうな状態で鎮座している。巡礼者の寄付によって貼り付けられた金箔に覆われた高さ約8mの岩は、別名「ゴールデン・ロック」とも呼ばれている。

ミャンマーではヤンゴンのシュエダゴン・パゴダ、マンダレーのマナムニダ・パゴダに次いで3番目に

重要な巡礼地となっており、現在も国内全土から熱心な仏教徒が巡礼に訪れている。

伝説によると、落ちそうで落ちないこの巨石の上に建てられたパゴダにはブダの聖髪の一部が納められており、これによって絶妙なバランスが保たれているといわれている。1975年、ミャンマーでマグニチュード6.5の大地震が起きた際には、山頂の寺院の大半は倒壊してしまったが、チャイティーヨー・パゴダだけは落ちずに留まっていたという。



【上】寄進の金箔を貼り付ける若い僧侶（写真：AsiaTravel / Shutterstock.com）。【下左】チャイティーヨー・パゴダまでは約1時間の登山が必要のため、人や荷物を運ぶかごかきを利用する人もいる（写真：SIHASAKPRACHUM / Shutterstock.com）。【下右】雨季が明けた10月下旬の満月の夜に行われる「灯明祭」（写真：SIHASAKPRACHUM / Shutterstock.com）。【右】絶妙なバランスを保っているチャイティーヨー・パゴダ。



## 14 Paro Taktsang

ブータン

## 標高3000mの断崖に建つ聖地 タクツァン僧院

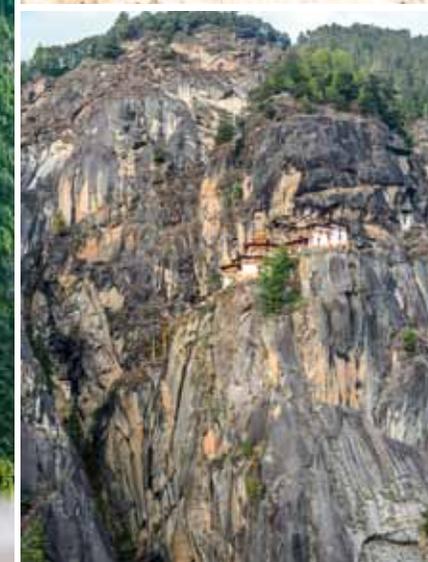
- ▶ 標高約3000mの山肌に張り付くようにして建つチベット仏教の僧院
- ▶ 標高の高さから、参拝者は高山病にかかる危険もある



国土の大部分を山岳地帯が占める秘境の国、ブータン。国民の大半がチベット仏教を信仰し、伝統的な文化や風習を守りながら暮らしている。そんな国民が、「グル・リンポチェ(大切な師)」と呼ぶパドマサンバヴァは、8世紀後半にブータンにチベット仏教をもたらしたとされる人物。トラの背に乗って飛来したと伝えられるパドマサンバヴァが降り立った地は、「トラの巣」を意味する「タクツァン」と名付けられ、聖地となった。そして、この地に1692年に建

てられたのがタクツァン僧院である。

標高約3000mの山肌に張り付くように建つタクツァン僧院は、今も多くの僧侶が修行を行う現役の僧院。車が入れるのは山の裾野までで、そこからは山道を2時間以上歩くことになるのだが、標高が高いため通常の登山よりも難易度が高く、高山病になる観光客も多い。また、僧院内へは貴重品以外の物は持ち込み禁止、お堂に上がる際には靴を脱ぎ、襟付きの服で正装するなど、さまざまな決まりがある。



【左】第2展望台からタクツァン僧院を望む。【上】山の中腹にある第2展望台までは、馬をレンタルして登ることもできる。【下左】絶壁に張り付くようにして建っている。【下右】第1展望台前の大きなマニ車(\*)。至る所に「タルチョー」と呼ばれる5色の旗がはためいている。

## 15 *Leh-Manali Highway*

インド

ヒマラヤを走る雲の上の山岳道路

# レー／マナリハイウェイ

▶ 平均標高4000mの過酷な道

▶ 途中、標高5000m前後の峠を3回越えなければならない



【アクセス】デリーからレーまで飛行機で約1時間。

インド北部、ヒマラヤ山脈とカラコルム山脈の間に位置するラダック地方は、インドで最も高い高山地帯のひとつであり、「月の砂漠」とも呼ばれる乾いた茶褐色の荒涼な大地が広がっている。

レー／マナリハイウェイは、ラダックの中心都市レーと、クル渓谷北部、標高約2050mの大自然のなかにある人気の保養地マナリとを結ぶルート。平均標高4000m、森林限界をはるかに超えた「世界の屋根」ヒマラヤを通る全長490kmの道中では、標高5000

mクラスの峠を3回越えなければならない、最大の難所であるタグラン峠は、なんと標高5317mに達する。

悪路が続くが、この区間はインドでも一二を争う美しさと称されるように、次から次へと絶景が現れる。突き抜けるような青い空と白い雲、万年雪をかぶったヒマラヤの峰々と赤茶けた山肌は、地球上のものとは思えないほどの光景だ。非常に過酷な道だが、この絶景を求めて世界各国からバイク乗りや自転車乗りが集まるといふ。



【上】崖に面した急なカーブを曲がるトラック。この地域のトラックは色彩や飾りが派手なものが多い(写真: Daniel Prudek / Shutterstock.com)。【下左】ツーリングを楽しむ旅行者も多い(写真: f9photos / Shutterstock.com)。【下右】悠然と歩く野生の馬。【右】つづら折りの道が続くレー／マナリハイウェイ。

赤茶けた山肌と抜けるように青い空のコントラストが美しい。このハイウェイは標高5000mに達する場所もある過酷なルートであるため、ここを通ることができるのは5~9月の夏の間だけで、安全面から冬には閉ざされてしまう。



## 16 Indian Railways

インド

世界一混雑する鉄道  
インドの通勤列車

- ▶ ラッシュ時は乗車率250%になることもあり、1日平均12人が死亡
- ▶ あまりの混雑からけが人や死傷者が後を絶たない



【左】屋根の上にあふれた乗客(写真:Pruchyathamkorn / Shutterstock.com)。【右】ムンバイの通勤風景(写真:Matyas Rehak / Shutterstock.com)。

総延長6万2000kmを超えるインドの鉄道は、世界第5位の規模を誇ると同時に、世界で最も混雑する鉄道システムのひとつとして知られている。

なかでも「世界一混雑する列車」として有名なのが、約1248万人の人口を擁するインド最大の都市ムンバイを走る、ムンバイ近郊鉄道だ。1日の乗客数は約694万人にのぼり、インド国鉄全体の過半数を占める。特にラッシュ時の乗車率は250%にもなり、定員200人の車両に500人が詰め込まれるのだ。

そのため、別のホームに移動する際に線路を横断し通過列車と衝突、車内に入ることができず屋根の上に乗車した乗客が架線に触れ感電、ドアや窓につかまって乗車し走行中に転落などの事故が多発し、1日に平均12人が死亡する。このことを問題視した行政も公共交通機関を整備し、車両や運行数を増やすなどの対策を行っているが、それを上回るペースで乗客数が増加しているという。

牛乳が入った容器を窓枠にぶら下げて運ぶつわものもいる(写真:JeremyRichards / Shutterstock.com)。



【アクセス】ムンバイ：ムンバイ空港から市内まで約1時間半。

## 17 Door to Hell

トルクメニスタン

絶え間なく燃え続ける砂漠の大穴  
地獄の門

- ▶ 40年以上有毒ガスを噴き出しながら燃え続けている
- ▶ 砂漠にぽっかりと空いた大穴は、まさに地獄へ通じているかのよう

国土の70%をカラクム砂漠が占めるトルクメニスタン。その中南部に位置するアハル州の小さな村ダルヴァザには、人をのみ込まんばかりに大きく口を開けた、「地獄の門」と呼ばれる巨大な穴がある。

カラクム砂漠には石油や天然ガスが豊富に埋蔵されており、ダルヴァザでも1971年にボーリング調査が行われた。その際、天然ガスが満ちた洞窟を発見したが、調査の過程で落盤事故が発生し、直径50~100mにもなる巨大な穴が空いてしまった。さらに、その穴からは可燃性の有毒ガスが絶えず噴出し、それを食い止めるために仕方なく火を放つこととなった。以来、地下から絶え間なく噴出し続けるガスのために、40年以上にわたって燃え続けているのだ。

現時点では燃焼を止めるすべはなく、ガスの埋蔵量も不明なため、いつまで燃え続けるかも定かではないという。夜になり辺りが闇に包まれると、真っ赤に燃える穴が不気味に浮かび上がり、「地獄の門」の名にふさわしい姿を現す。



【アクセス】アシガバートから車で3~4時間。



【上】夜の地獄の門。真っ赤に燃え上がる様子はまさに地獄の門そのものだ。【下】荒涼とした砂漠に突如現われる巨大な大穴。



 **Dallol**

エチオピア

## アフリカ大地溝帯に広がる極彩色の絶景 ダロル火山

- ▶ 酸化鉄、硫黄、塩が混ざった有害なガスが発生している
- ▶ 海拔マイナス45mに位置し、気温55℃に達することもある



エチオピアとエリトリアにまたがるダナキル砂漠。アフリカ大地溝帯に位置し、気温50℃以上に達するという、世界で最も暑い場所のひとつだ。大地溝帯は1000万～500万年前に形成が始まったとされる巨大な谷で、マントルの上昇流が地殻にぶつかり、東西に流れたことで大地が引き裂かれた結果、生まれたもの。海面よりも低い土地にあるダナキル砂漠は、その中心であるアフール盆地に位置しており、現在も火山活動が非常に活発な場所となっている。

なかでもダロル火山は、火口が海拔マイナス約45mにあり、世界で最も低い噴火口を持つ火山として知られる。爆発によって生じた「マール」と呼ばれるクレーター状の地形で、現在の姿は、1926年に起きた水蒸気噴火により、直径約30mのクレーターが生じたことで形成された。驚くべきは、地球上とは思えない極彩色の大地や温泉が広がる光景。これは、塩、硫黄、カリウムなどの鉱物を含む地下水が噴出した後、堆積したことによって生まれたものだ。



【左】ダロル火山の周辺に広がる極彩色の大地。ところどころにある塊は、食塩泉や酸性泉が噴き出る間欠泉によって形成された塩の塊だ。【上左】温泉は強酸性で、触れると皮ふがただれることもあるので、十分注意が必要。【上右】長い年月をかけて塔のように成長した塩の塊。【下】採掘した塩をラクダに積み、運ぶ人々(写真: Matej Hudovernik / Shutterstock.com)。

## 13 Mount Nyiragongo

コンゴ民主共和国

# 世界で最も危険な火山のひとつ ニーラゴンゴ山

- ▶ 2002年の大噴火では溶岩が麓の市街地まで流出し、35万人が避難した
- ▶ 火口のクレーターには直径約2kmの溶岩湖が煮えたぎる



【アクセス】ゴマ市街からヴィルンガ国立公園のキパチレンジャーステーションまで車で約30分、そこからトレッキングツアーに参加。



赤く煮えたぎるマグマの荒々しい姿を目にすることができる。火口内の半円形の溶岩湖。ニーラゴンゴ山頂の火口の内側は何段かの岩棚を伴う急な斜面になっていて、その深さはおよそ400mにも達する。

コンゴ民主共和国の東端にそびえる標高3470mのニーラゴンゴ山は、山頂で激しい活動を続ける溶岩湖で知られる。溶岩湖とは、火口内を高温の溶岩が満たした状態を指すが、ニーラゴンゴ山の溶岩湖は直径約2km、深さ約250mと、世界最大を誇る。赤く煮えたぎる溶岩の温度は約1000℃にも達し、中心からは常に水蒸気とガスの噴煙が立ち昇り、まるで地獄の釜のような不気味さを放っている。

そんなニーラゴンゴ山は世界で最も危険な活火山

のひとつといわれており、過去150年の間に何度も大規模な噴火を起こしている。特に、2002年1月17日に起きた大規模な噴火では、大量の溶岩が麓のゴマ市街地や空港にまで流出。全長約20kmに達した溶岩流によって至る所で火災が発生し、さらに溶岩がガソリンスタンドに引火し爆発するなど二次災害も広がった。その結果、街の約5分の1が破壊され、近隣住民約35万人が避難を余儀なくされるなど、甚大な被害を出すこととなった。

## 14 The Big Hole

南アフリカ

# 人力で掘られた地球最大の穴 ビッグ・ホール

- ▶ 深さ214m、周囲約1600mの、世界一大きい人力で掘られた穴
- ▶ 現在は穴の半分を地下水と雨水が満たしている



【アクセス】キンバリー駅から車で約10分。

南アフリカ中部の都市キンバリー。その歴史は1866年、街を流れる川で遊んでいた子どもがダイヤモンドの原石を発見したことに始まる。後に「ユレーイカ」と呼ばれるその石を譲り受けたヴァン・ニーカークは、1869年に84カラットのダイヤモンド「アフリカの星」を発見し、巨額の富を得た。この噂は各地に広まり、一攫千金を狙う人々が集結し発掘ラッシュが始まった。そして同じくダイヤモンドを求めて1871年にこの地に侵攻したイギリスによって植民地に編入されると、キンバリーと名付けられた。

ビッグ・ホールは、以降50年近く続いた鉱山開発の結果生まれたもの。深さは約214m、直径は463mに及び、人力だけで掘った穴としては地球最大を誇る。すべて掘り尽くされて1914年に閉山となったが、それまでに2250万以上の土砂が掘り起こされ、2722kgものダイヤモンドが採掘された。現在は穴の半分を水が満たし湖のようにになっているが、その巨大な穴は、人間の果てしない欲望を物語っている。



【上】高層ビルなどが建つ街並みのなかに、突如として現れる巨大なビッグ・ホール。【下】地下水や雨水が溜まり湖のようにになっている。





## 世界のデンジャー・スポット

2015年12月1日 初版第1刷発行

発行人 伊藤 滋  
編集人 宮下啓司  
発行所 株式会社 自由国民社  
〒171-0033 東京都豊島区高田 3-10-11  
電話 営業部 03-6233-0781  
編集部 03-6233-0787  
ウェブサイト <http://www.jiyu.co.jp/>  
印刷所 株式会社 光邦  
製本所 加藤製本株式会社  
デザイン 谷伸子・小島優貴・梶間伴果  
(EDing Corporation)

落丁・乱丁本はお取替えます。  
本文・写真などの無断転載・複製（コピー）を禁じます。  
定価はカバーに表示してあります。  
© Jiyukokuminsha 2015 Printed in Japan